投稿論文

国際移動する母親のジェンダー規範をめぐる経験
――グアムの日本人コミュニティを事例に

芝野 淳一　大阪成蹊大学専任講師

キーワード：国際移動する母親，〈教育する母〉規範，日本人コミュニティ

近年，日本社会におけるジェンダー規範からの解放を求めて国際移動する日本人女性の研究が蓄積されている。本稿は，これまで焦点化されてこなかった「母親」という存在に着目し，国際移動とジェンダー規範の関係を明らかにするものである。具体的には，グアムに移住した長期滞在・永住者の日本人母親（移住母）を対象に，彼女らの〈教育する母〉規範をめぐる移住経験を，日本人コミュニティ内部における駐在員の母親（駐在母）との関係性に焦点を当て描き出す。

本稿で得られた知見は，次の二点である。①移住母は日本社会のしがらみから脱出するために来島したが，移住後に学校を中心とした日本人コミュニティに埋め込まれ，移住形態や階層的背景，子育ての価値観を異にする駐在母と接触することで，日本で経験したような〈教育する母〉規範をめぐる葛藤を抱えることとなっていた。②しかし，現地で生活基盤を築き「現地社会で生きていけている」という帰属感覚を得ることで，〈教育する母〉規範を体現する駐在母とは異なる母親像を構築し，ジェンダー規範をめぐる葛藤を緩和させていた。一方，駐在母は日本人の母親たちを抑圧しているはずの〈教育する母〉規範を資源化し，日本社会に帰属を求めることで移住母との差異化を図りながら移住生活を送っていた。

以上を踏まえ，本稿の知見と先行研究の相違を考察し，当該研究領域に与える示唆を論じた。

1　問題の所在

移動の時代と呼ばれる現在，出生国とは異なる場所で生活を営む人々は決して珍しい存在ではない。日本も例外ではなく，海外に居住する日本人は年々増加傾向にあり，2014 年度時点で 129 万 175 人にも上る（外務省「平成 27 年海外在留邦人数調査統計」）。

近年，海外に移り住む日本人の新たなトレンドとして，戦前や終戦直後に海を渡った日系移民とは違い，経済的困窮や仕事の都合といった理由以外で，自らの生活の質の向上を目指して移住する長期滞在・永住者の存在が報告されている。かれらは「ライフスタイル移民」（佐藤，1993；長友，2013）などと呼ばれ，これまで日本人移住者の典型であった企業の駐在員とは異なる「新しい移民」として位置づけられている。1980 年代後半以降，「円高の進行，製造業やサービス業のグローバル化により，海外留学や，海外で就労，起業する者が増加」（金戸，2009：143）しており，かれらの移住先もバラエ

ティに富んでいる。

このような新しいパターンの移住に関する研究の中で多く蓄積されているのが，1990 年以降に自発的に国際移動した日本人女性に関するものである（佐藤，1993；酒井，1998, 2003；Kelsky, 2001；コバヤシ，2003；南川，2007a；金戸，2009；山下，2009 など）。そこで主に対象となってきたのは，男性中心主義的な日本の企業から脱出し現地採用者として移住するものや，日本の結婚をめぐる規範から自由になるために海外に出るもの，そして海外に憧れをもち国際結婚を希求し単身で移住する若者であった。移住先，移住目的，移住後の経験にバリエーションは見られるものの，これらに共通して描かれているのは，日本社会におけるジェンダー規範を切り抜け（コバヤシ，2003），より良い生き方を求めて越境する日本人女性の姿である。

他方で，女性の国際移動とジェンダー規範の関係について論じる際，「母親」というジェンダー化された存在を忘れてはならない。日本の母親研究では，「他の誰でもなく親こそが子供の教育の責任者であるという観念を持ち，子どもを濃密な教育的視線の下で養育する」（広田，1999：70）ことを担わされる母親を，しばしば〈教育する母〉と呼んでいる（神原，2004）。こんにちの日本社会において〈教育する母〉としての生き方は，日本の母親の主要な選択肢になっているという（神原，2004：194）。これまで〈教育する母〉は，「子育てに強迫される母親」（本田，2008）として，子育て経験に潜む階層的背景による格差や，家族の再生産労働の責任者としての葛藤や困難が明らかにされてきた（神原，2004；本田，2008）。すなわち，「母親」であるがゆえに経験するジェンダー規範の問題が指摘されてきたのである。

こうした文脈を踏まえ，本稿では国際移動する母親を対象に，〈教育する母〉というジェンダー規範をめぐる経験について，グアムの長期滞在・永住者の事例より明らかにすることを目的とする。それを通じて，日本人女性の国際移動とジェンダー規範の関係についての示唆を提示したい。

2　先行研究の課題と分析の視点

これまで，国際移動する日本人母親の研究では，主に日系企業の海外進出にともない増加した駐在員の母親に関する論考が提出されてきた（山田，2004；Martin, 2007；南川，2007a；額賀，2013）。彼女らの移住経験は，「日本人女性のジェンダー役割の（再）構成」（南川，2007a：35）のプロセスとして描かれてきた。彼女らは海外赴任する夫に付随して移動するために，移住先で「専業主婦」として家族を支えるという役割に特化しやすい（南川，2007a）。それゆえに日本にいたとき以上に母親業に徹しなければならないという，駐在員の母親が直面する葛藤や困難が指摘されてきたのだった（山田，2004；Martin, 2007；額賀，2013）。これは，日本の母親研究が問題化してきた〈教育する母〉規範が，移住先においても駐在員コミュニティという「小さな日本」（南川，2007a）の内部で再現されていることを意味している。日本の経済状況の変化により，伝統的なジェンダー役割にこだわらない駐在員の母親が一部出現していることが指摘されているものの，そういった人々が大半を占めているとは言い難い（山田，2004：223）。

他方，数少ない長期滞在・永住する日本人母親の研究の中で，Igarashi が興味深い論考を提出している。そこでは，より良い生き方を求めハワイへ「親子留学者」として移住する富裕層の日本人母親を「ライフスタイル移民」と位置づけ，彼女らが現地の社会的・文化的コンテクストの中で日本国内のジェンダー・イデオロギーから解放されリラックスした生活を送る姿が記述されている（Igarashi, 2015）。この事例は，１節で紹介した，日本人女性の国際移動がジェンダー規範からの解放を可能にすると主張してきた先行研究と同じ文脈に位置づけることができる。

これらをまとめると，国際移動する日本人母親に関する研究では，〈教育する母〉規範から解放される自発的な移住者としての長期滞在・永住者の母親と，〈教育する母〉規範に縛られ抑圧される駐在員の母親という対照的な描かれ方がされてきたと言える。しかし，海外に移住した日本人のほとんどが帰属することになる日本人コミュニティの内実を踏まえれば，これら先行研究が日本人母親の移住経験の一側面しか捉えていないことに気がつく。

海外で暮らすほとんどの日本人は，同じコミュニティにおいて集住し，「日本」にまつわる組織と関わりをもって生活している（町村，1999；酒井，1998）。そのコミュニティは，かつてのように駐在員が主な構成員となっている均質的な場所ではなく，移動形態や階層的背景の異なる多様な日本人が共に生活する場となっている。また，現代の日本人移民は，日本と実質的なつながりを保持していることが多く，日本から完全に切り離されたものではない（南川，2007b：28）。すなわち，かれらは「トランスナショナルな社会空間」（Levitt & Schiller, 2004）に生きているのである。トランスナショナルな社会空間は，「出身先，移住先の様々な権力構造や社会関係が越境して，散在する個々人に影響を及ぼす」場である（永田，2011：37）。それゆえに，出身国の規範や階層構造が持ち込まれ，階層的背景の異なる同国出身者のあいだに不和と分断が生じることがあるとされる（小井土，2005；Paerregaard, 2008）。事実，コミュニティ内における日本人同士（駐在員と長期滞在・永住者）の軋轢や分断は，様々な地域において報告されている（町村，1999；金戸，2012；長友，2013）。もちろん，母親もこうした状況とは無縁ではなかろう。長期滞在・永住者にせよ駐在員にせよ，子育てをする母親の立場を担う女性にとって，日本人学校や補習授業校を中心とした日本人コミュニティに参入することは必至である。こうした状況を踏まえると，日本から海外に「脱出」した長期滞在・永住者の母親であっても，〈教育する母〉規範をめぐり何がしかの葛藤や対立を抱えていることは想像に難くない。なぜなら，日本人コミュニティ内では子育てを中心とした役割が自明なものとして母親に課せられていると考えられるからである（山田，2004；額賀，2013）。

したがって，移住先で生じているのは，日本と地続き的に存在するトランスナショナルな社会空間としての日本人コミュニティにおいて繰り広げられる，移動形態も階層的背景も異なり教育意識や価値観も違う人々の「母親として生きること」をめぐるせめぎ合いであることが想定される。長期滞在・永住者の日本人母親の解放の経験と同時に捉えなければならないのは，その裏側に潜むジェンダー規範をめぐる葛藤や対立の経験でもあるのだ。以上より本稿では，筆者が継続して行っているグアムでのフィールド調査に基づき，長期滞在・永住目的で移住した日本人母親（以下「移住母」と呼ぶ）の〈教育する母〉規範をめぐる移住経験を，駐在員の日本人母親（以下「駐在母」と呼ぶ）との関係性に着目し描き出す。

3　調査概要

(1)　フィールドとしてのグアム

グアムは人口 18 万人ほどの島嶼部であり，年間約 100 万人近くの日本人が訪れるメジャーな観光地である。それは，「日本人の楽園」（山口，2007）と呼ばれるほどである。外務省「平成 27 年海外在留邦人数調査統計」によると，2014 年度時点で 4,484 人の日本人がグアムに居住しており，「長期滞

在者」が1,711人,「永住者」が2,773人となっている。前者を駐在員，後者を長期滞在・永住者および国際結婚者と想定すると（佐藤，2001），グアムの日本人の約6割が駐在員以外の人々である。

観光地イメージの強いグアムであるが，そのイメージによって不可視化されている二つの歴史的文脈を忘れてはならない。第一に，植民地主義と切り離せない歴史があるということである。グアムはスペイン，アメリカ，日本によって占領された背景があり，第二次世界大戦後はアメリカの非編入領土となっている。これまで，グアムにとっての植民地主義を考える上で，アメリカによる軍事化と多文化的な状況，ひいてはそこで生じているレイシズムの問題と向き合う先住民（チャモロ）の姿が取り上げられてきた（長島，2015）。第二に，戦前よりグアムと日本の間には長い交流史があるということである。日系人が現地社会に大きな役割を果たしてきたことは，グアムと日本の双方の歴史において重要な事実である（山口，2010）。

観光をめぐる研究領域では，日本人観光客がこうしたグアムの植民地化の経緯や日系移民の歴史等に触れることが困難な状況にあることが問題提起されてきた。こうした現状を，山口（2007）は，「グアムなきグアム観光」と呼んでいる。次節で論じるが，本稿で取り上げる移住者たちも，グアムと日本人をめぐるこの観光の議論と無縁ではない状況を生きている。実際，ツーリズムとも結びつく移民は先進国の殺伐とした生活を逃れ，南の暖かいリゾート地に移住することが報告されている（Benson & O'Reilly, 2009；長友，2013）。すなわち，観光イメージの消費の延長上に，海外移住が成立しているのである。

先行研究によって導かれる以上の点に加えて，本事例を記述するにあたり本稿の移住者たちが置かれているグアムのローカルな文脈を押さえておく必要がある。第一に，グアム社会における日本人の社会経済的地位についてである。グアムはフィリピンを中心とした移民が多く貧困率や失業率が高い。一方で日本人の年間所得は全てのエスニシティ・人種の中で最も高い（長島，2015：85）。さらに，全島総生産の約7割を占める観光業および関連産業の主な担い手と消費者が日本人である（山口，2010）。これらにより，日本人はグアム社会における人種構造の中で社会経済的に比較的高い位置にいる。第二に，生活環境である。インフラ等を含め日本人が生活するのに困らない環境が整っていること，日本人観光客が多く日本語・日本人との接触が多いこと，日本と物理的距離が近いことにより，「海外」に住みつつも常に「日本」が視界に入ってくること。こうした状況により，他地域よりも「日本に近く，住みやすい海外」となっている。第三に，地理的環境である。島嶼部であるがゆえに土地面積が極端に狭く，日本人が特定の地域に集住していること。また，学校選択の際，島に1ヶ所しかない日本人学校か補習授業校のいずれかに日本人移住者が集中すること。こうした環境により，他の地域よりも多様な背景を持つ日本人同士の接触が日常的に生じている。

⑵ 調査対象と方法

本稿のデータは，2012年から2014年にかけて断続的に実施した4回（のべ3ヶ月間）のフィールド調査とインタビュー調査によるものである。聞き取りは，フィールド調査で出会った知人を通じてアクセスした小学生から大学生までの子どもを持つ移住母（20代後半から50代前半）19名に対して半構造化形式で行い，40分から2時間の間で実施した。表1が示すように，移住母のほとんどが非四大卒・非専業主婦の母親であり，日本にいるときも移住後も「働く母親」であった。これは次に示す駐在母の階層的背景と対極をなすものであり，本データの最大の特徴であると言える。彼女らは，自営業（主に観光関連業），語学留学，日系企業の現地採用などで在留資格を取得し，約半数の母親が永住権を取得していた。家族で来島した人もいるが，単身で来島後に現地在住の日本人と結婚した人や，現地人と国際結婚した人もいる。また，語学留学者は一時的な在留資格として留学ビザを取得した人々であり，全て永住希望者である。

表1　「移住母」と「駐在母」の内訳

対象者	人 数	四大卒者数	職業等（現在）
移住母	19	2	自営業　：8 現地採用：9 語学留学：2
駐在母	15	14	専業主婦：15

さらに，本調査では，日本人コミュニティにおける母親関係を多角的に捉えるために，駐在母15名にもインタビューを行った。彼女らのほとんどが，高学歴・専業主婦の母親であった。本稿では主題として取り上げないが，日本人コミュニティ内部の母親関係を多面的に描くために，後半部において分析を加えている。

筆者は調査期間中，日本人が集住する地域に滞在し，日本人コミュニティ内部を中心にフィールドワークを行った。バス停での見送り・出迎え，ロビーでの立ち話しから飲み会まで，誘われるものには全て参加し，日々起こる出来事をノーツに記録した。また，グアム日本人学校・補習授業校でも調査を行い，学校や保護者・子どもの様子を観察し，教員への聞き取り調査を行うなどした。これらの記録は，インタビューによって語られた母親の経験を解釈する際の背景的知識として位置づけられる。このように，対象者の日常生活に接近しつつインタビューを実施することで，かれらの生きられた経験をより深く理解する方法を「エスノグラフィック・インタビュー」（O'Reilly, 2012）と呼ぶが，本稿はこの方法論に依拠して記述されたものである。

4　移住母の移住プロセス

⑴ 移住経緯

前節で提示したように「移住母」の移住プロセスは多様であり，移住前・移住後の家族形態や就労状況なども様々である。しかし，移住経緯や移住後の生活については，共通するところが多かった。まず，移住経緯を見ていこう。

移住母の移住動機は，しがらみが多く生きづらい日本からの脱出や，日本に住んでいては成し遂げることのできない夢の実現といった，「より良い生き方の追求」（Benson & O'Reilly, 2009）をめぐるものであった。彼女らは，自己実現の手段として海外移住を選択していたのである（長友，2013）。以下の語りはその典型例である。

> やっぱり若いってすごいですよね，今考えると。何にも考えてなかったし，何にも準備もしなかったし，とりあえず段ボール10個ぐらいで引っ越して来て，とにかく，日本から出るんだって。だから，かなり苦労しましたね。うちみたいな（現地採用）タイプっていうのは，そんなに給料もいいわけじゃないし，待遇もいいわけじゃないんですよね。（サキさん／40代／短大卒／13年／自営／息子：高3，高1，小5／12.2.22）[*1]

サキさんは13年前，移住後の経済的困窮のリスクを想定していたにもかかわらず，日本では叶えることのできなかった海外で飲食店を開くという夫婦の夢を叶えるためにグアムにやって来た。日系企業に現地採用され何年か働いた後，飲食店を営むようになり，移住当初の「夢」を実現させた。また，シングルマザーで来島し，その後グアムに住む日本人と結婚したトモミさんは，次のような経験から移住を決意したと語っている。

> 日本に住んでる時に離婚したんですね。母子家庭になってしまって，そういうので周りからつめたい目で見られたりするじゃないですか。それが（子どもにとって）かわいそうだなっていうのがあって。（住んでいた所が）私立の小学校当たり前みたいに，そういう会話が飛び交う。そういうのも全て離婚で，スパーンと飛んで。それどころじゃ。で，娘と（グアムに）来たんですよ，お疲れ旅行で。そしたら，みんな寛大だし，すごくのびのびしてて，いいなと。（トモミさん／40代／専門卒／8年／自営／娘：中2，3歳／12.2.9）

〈教育する母〉規範を自明なものとして順守する高学歴・高階層の母親が多く暮らす地域で過ごしていたトモミさんは，離婚したことや「働く母親」であることによって周囲からつめたくまなざされ，子どもが生きづらさを感じてしまうことを危惧していた。このような状況から脱出するために，彼女は海を渡ることを決意した。そして，紆余曲折の末に憧れの「南の島」に辿りついたのである。

興味深いのが，彼女らが移住先に「グアム」を選んだ理由である。移住前に観光などでグアムに来島したことがあるかどうかに関係なく，「近くて安い」海外（山口，2007），日本語で過ごせる海外，のびのびとした南の楽園といったグアムの観光イメージに基づいて移住していたのだった。

⑵ 移住後の生活

次に，移住後の生活について見ていく。まず，最も多く語られたのが，グアムで生計を立てることの大変さである。前項で見たサキさんの語りも，そのひとつに含まれる。移住母のような日本人移住者は，学費の補助なども含め，駐在員のように日本政府や企業からの庇護を受けることができない（町村，1999；酒井，1998, 2003）。同じ進出日系企業で働く日本人社員の間でも，駐在員と現地採用者では給与待遇や身分に大きな格差が生じている（町村，1999）。さらに，かれらは現地社会において切迫した経済状況にはない「ミドルクラス」と見なされるために，政策的関心を引きにくく，福祉的な恩恵を受けることが難しい（Shiobara, 2005）。そして何より，米国籍をもたない「移住者」であるため，アメリカ国家から完全に保護される存在ではない。したがって，移住母は社会的経済的に自立せざるを得ない状況にあるが，このことは子育てにも大きな影響を与えている。多くの母親は，現地で生活するためにフルタイムで働いており，子どもの教育に時間を割くことができないと語っている。

> グアムで一番貧乏な日本人と思って暮らそうと言ってやったぐらい，本当に大変でした。（子どもは）半分ほったらかし状態でしたね。休みもゼロだったので，店に娘も連れて行ったりとか。でもこっち（グアムの現地人）はだいたいそうなんですよね。おかげで，我慢強い子になったかもしれないですね（笑）。（セイコさん／40代／不明／13年／自営／娘：高1／13.2.27）

しかし，セイコさんが話すように，社会的経済的に自立しなければならないがゆえに生じる〈教育する母〉規範からの逸脱は，グアム社会ではむしろ「普通」である。なぜなら，日本と比べてグアムには貧困層や離婚家庭が多いこともあり，母親が働くことは現地社会では当然のことだからである。ほとんどの母親が，日本にいたときよりも経済的に苦しいと話す一方で，子育てに関しては「働く母親」が多いグアムのほうが精神的に「楽」だと語っていた。

また，仕事と子育ての両立の仕方も特徴的である。南川（2007a）が言うように，駐在母は専業主婦として家族生活を支える役割に特化しやすく，とりわけ閉じられたネットワークの中で子どもの教育に関心を集中させる傾向にあった。一方で，移住母は夫婦で家事を分担し，家庭の外部とオープンな関係を築くなどして仕事と子育てを両立しようとしていた。エリコさんは，交友関係を有効活用した家族ぐるみの付き合いを「ファミリー・フレンド」と呼び，その内実を次のように語っている。

> 日本とか，普通のママ友って，お母さんと子どもセットのグループじゃない。でもここでは友だちはファミリー・フレンド。旦那さんも子どもも，子どもいない人も，友だち【筆者：子どもを通してじゃない】そう，私の友だちの中に子どもがいるみたいな。仕事も年齢もバラバラなんだけど，境遇は似てるのよね，ここに自分で働きに来てる人は。みんな個別で来てる。会社のグループとかもない，頼れる人いない。だから「今日ちょっと手伝ってもらえる？」とかお互いに言いやすい。（エリコさん／40代／専門卒／6年／現地採用／息子：中2，就学前／13.2.10）

留意しておきたいのは，こうした彼女らの移住後の生活世界が，現地社会の歴史的文脈から切り離されたところに存在していることである。プライベートな関係性だけではなく，移住母全員が「観光地グアム」において日本人観光客を相手にする仕事についている。同僚もほとんどが日本人である。自営業者の中には，フィリピン系の従業員を雇っているものもいるが，プライベートで付き合うほどの深い関係はないという。居住地も観光地付近にあり，日本人が集住している。彼女らは，「海外に住んでいる気がしない」「ここは日本国グアム県」「ガイジンが多い日本」などと自らの生活の場を語っている。これらの語り方に，グアムの歴史的文脈やローカル性の影響を見ることができるかもしれない。しかし，彼女らの生活世界において現地社会との関係性を構築している様子について語られることは稀である。

このように，移住母は，経済的・文化的・社会関係的に駐在母と異なる背景を有し，日本において成し得なかったライフスタイルを確立していた。またそれは，グアムのローカルな関係性においてではなく，同じような境遇の日本人の関係の中で達成されていた。こうした側面のみを見ると，移住母が，何のしがらみもなく日本社会にはびこる〈教育する母〉規範から解放された生活をグアムで行っているように見える。しかし，なかば必然的に日本人学校を中心としたコミュニティに埋め込まれる移住母は，そこで立場の違う駐在母と接触することにより，〈教育する母〉規範をめぐる葛藤を経験していたのだった。

5 「日本社会」への再埋め込みと〈教育する母〉規範をめぐる葛藤

⑴ 「学校に行くと疲れちゃうの」

グアムに住む多くの日本人は，観光地の近くにあるT地区に集住している。日本人は通常，現地校

と日本人学校の２校から子どもたちの就学先を選択する。現地校に子どもを通わせる場合，平日の放課後と土曜日に補習授業校に子どもを通わせるのが通例となっている。グアムの場合，両学校が同じ校舎で運営されており，スクールバスの停留所も同じである。したがって，たとえ現地校に通わせる親であっても，学校の行事や日々の送り迎えなどで，日本人の母親同士がほぼ毎日何らかの形で接触する。

このように，階層的背景の違う母親たちが同じ地域に住み，日本人学校や補習授業校のどちらかには必ず子どもを通わせている状況からは，日本社会の縮小版のような構図が浮かび上がる。学校を中心とした日本人コミュニティは，まさに「日本社会」そのものである。教員も，「日本よりも日本っぽい」場所であると述べるほどである。さらに，高学歴・富裕層の教育熱心な駐在母が積極的に参与する日本人（学校）コミュニティは，ともすると日本よりも〈教育する母〉規範が強く作用している場所であると言える。

移住母の多くは，日本人学校コミュニティにおいて駐在母と出会うことにより，彼女らとの間にある「違い」から生じる葛藤を経験していると語っている。カナコさんは，そうした経験を次のように振り返る。

> やっぱり出向組（駐在家庭）とは違うなと思ったことが何回もありますね。雰囲気がまず違います。出向組はちょっとバリアを作るっていう感じとかあるかもしれないですね。疲れちゃう。学校行くと疲れちゃうの。何か教育相談とかいろんな，たまに行かなきゃいけない時，そうするとすごい疲れます。普段みんな仲良しでキャーキャーやってるじゃないですか，たまに行ったら入れないじゃないですか。（カナコさん／50代／高卒／20年／自営／娘：高１，息子：中２／13.2.26）

普段は仕事で学校に携わることができない彼女は，学校内で影響力のある駐在母グループからのまなざしによって，精神的な苦痛を感じているという。前節で述べたように，移住母の多くは就労しており，子育てに全面的に関わることが難しい。それだけでなく，子育てに関する価値観も異なる。彼女らに，「『人格も学力も』という『全包囲型』の教育関心」（本田，2004：167）は見受けられない。最も多く聞かれたのは，子どもたちが「のびのび」と育って欲しいことや，手に職をつけて欲しいということであった。例えば，日本人補習授業校の選択理由に関する調査では，多くの駐在母が日本に帰国したときのための学力維持をあげていたのに対し，将来の選択肢を増やしたり，仕事に役立つ日本語の習得をあげるものが多かった（芝野，2015）。

> 仕事してる友だちはいっぱいいたんだけど，主婦のお友だちは全然いなくて。駐在の奥さんですよね。学校でもそれ以外でも，付き合い方がわからなくて。「子育てがんばってます」みたいな感じ。戸惑います。（ヨシカさん／40代／短大卒／20年／現地採用／息子：小６，娘：５歳／13.2.17）

こうした葛藤や戸惑いの経験は，来島間もない移住母によって迫力をもって語られることが多かった。駐在母との接触の中で，日本で経験した〈教育する母〉規範をめぐる葛藤を再び経験している典型的な事例が，次項に示すリナさん（来島２年目）である。

⑵ 「どこにいっても絶対いるんだと思いました」

リナさんは，専門学校を卒業後すぐに結婚し，その後出産と離婚を経験した。聞き取り時は29歳で，小学２年生の娘がいた。２年前，離婚を機に海外移住を決意し，語学留学生としてグアムにやってきた。その後，現地のフィリピン系の男性と国際結婚し，語学学校を中退した。彼女も日本にいるときに，ひとり親家庭であることや「母親らしくない振る舞い」（実年齢の若さ，「ギャル」のような格好，砕けた喋り方，子どもの学業達成に興味がないことなど）を理由に，周りの母親から「つめたく」見られていた経験を語っている。そのような経験もあり，リナさんは来島当初，殺伐とした日本から逃れ，のびのびとした南の島でゆったり子どもと暮らせることを期待していた。しかし，娘を補習授業校に通わせるようになり，教育熱心な駐在母と接触することで，再び周囲からの「つめたい」まなざしを感じることになる。

> はじめて日本人学校（補習校）の授業参観に行った時ね，嫌だなと思って，でも，グアムだし，明るい人たちだよねという希望を持って行ったんですよね。それで授業が終わったあとの懇談会があって，お母さんと先生の。そしたら先生が「新しく入った田中さん（リナさん）のママです」と紹介してくださって。頑張って「どうもこんにちは」って，すごい笑顔を振りまいたら，隣の人に「ああ」って。すごいつめたく見られて。怖いと思って，無理と思って。やっぱ日本人って，何ていうの，やっぱり怖いと思って。こういう「若め」の感じは嫌われるのかなと思って。だから嫌だと思って，二度と行きたくないと思った。もう，怖かったです。すごい怖かったです。【筆者：例えば，話していることとか，どんな感じなんですか，懇談会は。】先生が気になることはありませんかと聞いた時に，誰かのお母さんが，漢字のことについて聞いてましたね。授業が週１しかないじゃないですか，その分やっぱり普通の全日制の子とは全然違って遅れるじゃないですか。だから２年生で習う漢字が，まだちょっとしかできていないみたいで，今の段階で。それで３年生に上がった時に，また２年の復習をするという話しになったときに，「え，なんでですか」みたいな声があがって，怖いと思った。でも，いいじゃんどうでもみたいな。グアムにいるんでしょ，あなたと思ったり。【筆者：結構いるんですね，そういう人】いますね，どこいっても絶対いるんだと思いましたね。（リナさん／20代／専門卒／２年／現地採用／娘：小２／13.2.5）

「怖い」を連呼するリナさんの語りからは，日本で経験した教育熱心な母親からのまなざしを，そうしたまなざしから逃れられると「希望を持っていた」グアムにおいて再び経験している様子がうかがえる。また，「こういう『若め』の感じは嫌われるのかな」という語りからは，日本において「ギャル」のように派手に着飾っていることが，母親らしさの欠如としてネガティブに評価されてきた記憶が，移動先での駐在母との接触を通じて蘇っていることが読み取れる。日本の学歴主義や競争社会に対して価値を見出さず「日本語の読み書きができればいい」と補習授業校に娘を通わせるリナさんは，日本に帰って再びメリトクラティックな競争に参戦するために奮闘する駐在母と同じ空間に子どもを送り込むことにより，日本で経験した「恐怖」を再び経験することになっていた。「どこにいっても絶対いるんだと思いました」という語りは，国境を越えてもなお，駐在母との接触を通じて，日本社会における〈教育する母〉規範をめぐる葛藤が立ち現れていることを示していると言える。

⑶ バス停に行けない

先ほど見た「グアムだし，明るい人たちだよね」という言葉が示すように，「観光地グアム」のイメージを追いかけて移住してきたリナさんに突きつけられた「現実」は，非常につらいものであった。こうした経験は，彼女に更なる葛藤をもたらす。次の事例は，筆者が観察したスクールバスの停留所でのひとコマである。

> 午後５時すぎ，日本人学校のスクールバスの停留所にいつも通り多くの母親が集まり談笑している。しばらくすると，バスが到着し，子どもたちが下車する。母親は「おかえり」と子どもたちに声をかけ，子どもたちは停留所のあるマンションの中庭で遊ぶ。（中略）ベンチに座っていると，（リナさんの娘さんの）チエちゃんが僕のほうに来て声をかけてきた。「ひとり？」と聞くと，「うん」と答える。チエちゃんは，他の子どもたちの輪に入ろうとせず，僕とばかり話そうとする。（中略）たわいのない会話をし，小１時間が経ったころ，リナさんのお父さんがお迎えに来た。ヒップホップ系の格好をした若いお父さんである。清楚な服装をした駐在家庭の母親の輪の中に入ると，ひときわ目立つ。両者とも挨拶することなく，チエちゃんとお父さんは瞬く間に車に乗り込み，帰っていった。（フィールドノーツ／13.2.14）

この出来事のあと，リナさんから「娘がお世話になった」と連絡があった。チエちゃんが停留所で筆者と話せて楽しかったという内容だった。その会話の続きの中で，海外に連れて来たにもかかわらず，なかなか子どもに目をかけてあげられないことや，自分が「日本人の母親らしくない」ことや国際結婚をしたことで，娘がひとりぼっちになり日本人の子どもたちの輪に入れていないのではないか，他の日本人から変な目で見られていないかという悩みが打ち明けられた。さらに，自分が駐在母と関わることが「無理」なために，バス停に「子どもを迎えにいきたいけどいけない，いきたくない」という悩みが語られた。

彼女は，子育てに多くの時間を割くことができる駐在母の姿を見ることで，自らを〈教育する母〉規範から逸脱する存在とみなし，物理的な行動範囲を狭めていた。国境を越えてつきまとう〈教育する母〉規範は，それを体現する駐在母との関係を媒介し，彼女の生活空間をも制約していたのだった。

６ 〈教育する母〉規範をめぐる葛藤からの解放

⑴ 「どうだ，生き残ったのはどっちだ」

前節では，移住母が〈教育する母〉規範が作用する日本人コミュニティに参入することで生じる葛藤を明らかにしてきた。しかし，彼女らは，移住先で（再び）出現した〈教育する母〉規範の前に何もできずにいたわけではない。移住母は，グアムでの生活基盤を築き，「現地社会で生きていける」という帰属感覚を獲得することを通じて，駐在母が体現する〈教育する母〉規範をめぐる葛藤から解放されていた。つまり，時間の経過による母親の現地社会での定住や適応が，彼女らの抑圧された感覚を変容させていたのである（Waters, 2002）。例えば，サキさんは次のように語る。

> あったんですよ，ママ同士で「お勤めはどこ？」みたいな，「あら，役職は？」みたいな。「私んとこ？　何にもないですよー」みたいな。十何年前。だからすごくきつかったですよね。でもね，やっぱり帰らされちゃうんですよ，駐在のママは。そうすると，「どうだ，生き残ったのはどっちだ」とか思いますね。生き残ったっていうか，性格ゆがんじゃった系っていうかも（笑）。【筆者：日本に帰るとかいうビジョンみたいなのあったんですか？】いえ，意地でも帰らないと思いましたね。しがみついてでも。（サキさん／40代／短大卒／13年／自営／息子：高３，高１，小５／12.2.22）

意を決して日本から離れグアムへとやってきたサキさんは，グアムで生き残った，あるいはグアムを生き抜く日本人として自らを表象する。そうすることで，駐在母との差異化を図り，自らを卓越化していることがわかる。また，移動先において生活基盤を築いていく中で，グアム社会のある種ステレオタイプ化された価値観や生き方を自分たちの帰属感覚を構築するための資源とし，日本人コミュニティにおける駐在母との差異を強調しようとする移住母もいた。

> やっぱり腰かけ状態で，ステップアップの一歩として来ている（駐在家庭の）方たちと，ほんとにグアムに移住して，ここで食べていかないといけない私たちは，感覚は全然違う。駐在の方たちは，英語を学んでたほうが有利だとか，あくまでも帰った時のポイント制でやっている。私みたいな人は将来生きていくためにどうするべきかっていう，勉強なんかより，生きるための術を考えていく。（中略）だから一番子どもに望むことは，グアムに住んで私も学んだんですけど，自分一人で歩く自信を持って欲しい。日本人って意外と，やたら誰かと一緒につるまないと不安ていうか，すぐグループ派閥を作りたがって，大人もそうですけど。こっち（グアム）の人は自分をしっかり持っているから。（リカさん／40代／短大卒／13年／自営／息子：中３，小２，娘：小５／13.2.18）

これらの語りから解釈できるのは，移住母が駐在母を「日本」という磁場に引っ張られるとともに家庭内に封じ込められる母親として表象し，一方でそれに対抗する主体として自らを現地社会を生き抜く自立した強い母親として表現しているということである。つまり，異国の地で強く生きる日本人母と「日本」「家庭」に封じ込められる母との境界線が，移住母の語りにおいて立ち現われていると言える。彼女らが語る「現地社会」がグアムの歴史的文脈とどこまで結びついているのかについては議論の余地がある。しかし，いずれにせよ，この「異国の地で強く生きる日本人母」という母親像は，日本からの庇護を受けずアメリカ市民でもない彼女らが「現地社会で生きていけている」という帰属感覚の獲得を通じて構築されていると言える。

さらに，日本という守られた場所から離れ，そこで強く生きられるかどうかという語りを通じて，母親の階層（裕福な駐在員／保護されていない移住者），エスニシティ（日本に準拠する日本人／現地化される日本人），ジェンダー（従属的な母親／働く強い母親）といった多層的な境界が同時に語られていることにも注目したい。このように，移住母は移住後の時間の経過と生活基盤の構築を背景に展開される多層的な駐在母との差異化の実践を通じて，日本国内および日本人コミュニティ内部にも越境してくる〈教育する母〉規範から距離を取ろうとしていたのである。

⑵ 「ローカルのママはいいですよ，フリーで」

しかし，移住母が駐在母へ向けるまなざしは，意図せざる形で駐在母の〈教育する母〉規範の強化

と結びつく。それは，駐在母側からの移住母に対するまなざしに顕著に見て取れる。

> 私たち駐在の人は，まず，子どもを学校に行かせてっていうの，情報集めないとだめだから。でも，ずっとここに住む人は，「いいよね駐在の人は，お金いっぱいもらって何年か楽しんで帰るでしょ」って思っている人もいる。どうせ数年でいなくなるでしょ，遊びに来たんでしょ，みたいに思う人いますから。私たちも（日本に）帰ったときのこと考えないとだめだから，毎日結構大変なんですよって思いますけど。（村瀬さん／40代／短大／3年／駐在／／娘：小6，息子：小3／13.2.9）

村瀬さんの語りからは，駐在母が移住母から向けられる「裕福で従属的な母親」のまなざしを敏感に嗅ぎ取っていることがわかる。また自分たちが，帰る場所があり現地で自立して生きる必要のない，バカンスを楽しむ日本人母親としてまなざされているとも語っている。それに対抗するために彼女が持ち出すのが，帰国後の子どものことを常に想定しながら母親業をこなす「大変さ」である。次の岸さんの語りは，その「大変さ」を強調しつつ，移住母をまなざし返そうとするものである。

> 【筆者：日本に帰りたくないとか思いますか？】帰りたくないと自分の気持ちで言っても，（夫に）付随するものが大きいし，子どももいるので。子どもの将来を考えると，早く戻んなきゃっていうのがあるので。人間らしい生活はこっち（グアム）ですもんね。のんびりしてて，競争もなく何も縛られず楽しいことばっかりやってればいいみたいな。日本の友だちからは「ながーい夏休みね」って言われてますけど。その点，ローカルのママ（移住母）はいいですよ，フリーで。（岸さん／40代／大卒／2年／駐在／娘：小6，小2，息子：小4／13.2.15）

「ローカルのママはいいですよ，フリーで」という語りの「フリー」は，〈教育する母〉規範からの解放を意味している。そのフリーな存在とは，日本や家庭という磁場から解放された，「競争に縛られず楽しいことばっかりやってればいい」「人間らしい生活」を送る移住母（ローカルのママ）である。それに対して岸さんは，グアムで暮らすことが競争の激しい日本に帰って生きていかなければならないことに比べていかに「楽」なのかということを語っている。すなわち，移住母を〈教育する母〉規範から逸脱する自由で解放された存在と見なすことで，自分たちを〈教育する母〉規範を守り「徹底した母親業」（Hays, 1998）を遂行する母親として表象しているのである。こうした移住母との差異化から立ち現れるのは，自分の感情を内に秘めつつ異国の地で献身的に家族を支える日本人母という母親像である。

さらに，「日本の友だち」より〈教育する母〉規範から逸脱した存在としてまなざされることも，移住母との強固な境界を構築する要因となっていることにも着目したい。つまり，駐在母は，日本の同階層の母親から向けられた解放された自由な存在としての母親イメージを移住母に転移させることで，日本の〈教育する母〉規範への順応を図っていると言える。岸さんにとって，本当の「ながーい夏休み」を過ごしているのは，駐在母ではなく移住母であると解釈することができる。このように，駐在母は，日本人の母親を抑圧している〈教育する母〉規範から距離を取るのではなく，日本社会への帰属感覚を獲得するための資源としていたのである[*2]。

7 結 語

本稿では，グアムの移住母を対象に，彼女らの〈教育する母〉規範をめぐる経験を，日本人コミュニティ内部における駐在母との関係性に焦点を当てつつ明らかにしてきた。最後に，日本人女性の国際移動とジェンダー規範の関係を明らかにしようとする研究に対して本稿の知見が与える示唆を二点にわけて論じたい。

第一に，ジェンダー規範の「越境性」と「弾性」（George, 2005=2011）についてである。ここで言う「弾性」とは，変化が容易ではなく国境を越えても形を変えながら継続して人々に影響を与える様を表現する言葉である（小ヶ谷，2015）。本稿では，移住母が日本社会と連続性をもつ「トランスナショナルな社会空間」（Levitt & Schiller, 2004）としての日本人コミュニティに埋め込まれることで，〈教育する母〉規範から逃れられない様子を明らかにした。日本社会における階層的背景の異なる母親同士の社会関係と母親を抑圧するジェンダー規範が，海外の日本人コミュニティに持ち込まれていたのである。その結果，〈教育する母〉規範は国境を自発的に越えたとしても母親につきまとい，彼女らの生き方を規定していたのだ。このような，ジェンダー規範がもつ「越境性」と「弾性」（George, 2005=2011）は，「越境＝ジェンダー規範からの解放」というストーリーを強調する先行研究では，十分に議論されてこなかった点である。新しい生活を望み異国の地にたどり着いた移住母であっても，日本社会におけるジェンダー規範から解放されることは容易ではない。ジェンダー規範は，国際移動する女性たちに「しつこく」つきまとうのである。むろん，駐在母もまた「子育てを強迫される母親たち」（本田 2008）であることを忘れてはならない。ここで重要なのは，〈教育する母〉規範が母親にもたらす諸々の経験が，彼女らの移住形態や階層的背景によって質的に異なっているということである。

第二に，ジェンダー規範をめぐる「解放」と「帰属感覚」についてである。本稿では，ジェンダー規範と母親同士の社会関係が越境し，移住母に抑圧の経験をもたらす局面を記述しただけではなく，そうした規範をめぐる葛藤から解放される母親の姿も明らかにした。これまでの研究では，国際移動することがジェンダー規範からの解放に導くと主張されてきた。しかし，本稿の結果からは，移動すること自体が直接解放へと結びついているのではなく，現地社会にて生活基盤を築き根付いていくプロセスと，日本人コミュニティ内で生活する立場の違う母親との差異化実践を通じて，ジェンダー規範をめぐる葛藤からの解放が達成されていたのだった。すなわち，出身国からも移住先からも庇護を受けていない立場の移住母が時間の経過の中で「現地社会で生きていけている」という帰属感覚を獲得したとき，〈教育する母〉規範から上手く距離をとることができていたのである。ただし，そうした感覚が，現地の人々との親密な関係性や現地社会の歴史的文脈とは切り離された形で獲得されている可能性は否めない。

一方で駐在母は，〈教育する母〉規範への順応を図り，移住母が脱出した日本社会に帰属感覚を求めようとしていた。これまで駐在母は日本と移住先を同時に生きる中で，伝統的なジェンダー規範を担わされ，葛藤や困難を抱えていることが指摘されてきた。しかし，本稿では，駐在母が立場の違う日本人母親たちと接触することによって，むしろそうした規範を正当化しポジティブな母親像を構築するための資源とする姿が見られた。母親を縛り付けているはずの〈教育する母〉規範は，彼女らの置かれている状況や立場によって，海外の日本人コミュニティで生きていくための資源ともなり得るのである。

以上，本事例が当該領域に与える示唆を述べた。結局のところ，国際移動する日本人女性は，多かれ少なかれ，「『ホーム』である国と『ホスト』である国とに同時に埋め込まれていることがもたらす『苦痛と喜び』を背負い続ける」（ヨー，2007：158）ことを強いられていると言える。この点において，「母親」という存在に着目した本稿は，海の向こうで繰り広げられる「母親として，そして女性として生きること」をめぐる闘争の記録であり，「ジェンダー化されたトランスナショナリズム」（南川，2007a：40）のひとつの局面として捉えることができる。

日本人の移住の多様化が進む中で，海外の「日本社会」はますます重層的になり，そこで生きる女性の経験も多様なものとなっている。本稿は国際移動する日本人女性とジェンダー規範の関係について新たな知見を付け加えるものであるが，「グアム」の「母親」という限られた対象を取り上げたにすぎない。今後求められるのは，対象となる女性の立場性や当該地域の場所性を十分に考慮し，トランスナショナルな社会空間としての日本人コミュニティにおいて立ち現れる「解放的な契機と抑圧的な契機の両方」（George, 2005=2011：251）に着目した研究を蓄積することである。また今回は，日本人コミュニティ「内部」における母親の経験を深く掘り下げることを目的としたために，コミュニティ「外部」との積極的な接触によって経験されるジェンダー規範の問題について取り上げることができなかった。例えば，国際結婚によって移住し，日本人コミュニティとの関わりが相対的に薄い母親の移住経験などである。この点についても今後の課題としたい。

*1　インフォーマント情報の記載は次の通り。（仮名／年齢／学歴／来島年数／職業等／子ども／調査日）。

*2　他方，本調査において，駐在母として来島したが，赴任が長期化したことがきっかけでグアムに住み続けることを決意し，現地採用者として就労するようになった母親が１名いた。すなわち，駐在母と移住母の両方の立場を経験している母親である。彼女は，母親同士の分断状況を客観的に把握し，自らを駐在母でも移住母でもないグレーゾーンに位置づけ，双方に付かず離れずの関係を保っていた。また，駐在母や日本の高階層の母親が体現する〈教育する母〉規範についても相対的にまなざすようになっていた。このようなパターンの母親については，稿を改めて論じたい。

《参考文献》

邦語

- 小ヶ谷千穂，2015「人の国際移動とジェンダー」『国際社会学』有斐閣，132 ～ 147 頁
- 外務省「平成 27 年海外在留邦人数調査統計」（http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/，2016 年 1 月 29 日アクセス）
- 金戸幸子，2009「日本人の越境するライフスタイルにみる現代日本をめぐる『もうひとつの』多文化化――台湾でキャリアの再／構築をめざす日本人の国民国家を超える複合的な戦略から」『多言語多文化――実践と研究』2，138 ～ 165 頁
- 金戸幸子，2012「東アジアにおける日本人コミュニティのダイナミズムと変容――香港の事例を中心として」『藤女子大学紀要 第Ⅰ部』49，67 ～ 99 頁
- 神原文子，2004『家族のライフスタイルを問う』勁草書房
- 小井土彰宏，2005「グローバル化と越境的社会空間の編成――移民研究におけるトランスナショナル視角の諸問題」『社会学評論』56（2），381 ～ 399 頁
- コバヤシ・オードリー，2003「ジェンダー問題〈切り抜け〉としての移民――日本人女性のカナダ新移住」岩崎信彦・宮島 喬・ロジャー・グッドマン・ケリ・ピーチ・油井清光編『海外における日本人，日本の中の外国人――グローバルな移民流動とエスノスケープ』昭和堂，224 ～ 238 頁
- 酒井千絵，1998「ジェンダーの規定からの解放――香港における日本人女性の現地採用就労」『ソシオロゴス』22，137 ～ 152 頁
- 酒井千絵，2003「香港における日本人女性の自発的な長期滞在――長期滞在者からみた『香港就職ブーム』」岩崎信彦・宮島 喬・ロジャー・グッドマン・ケリ・ピーチ・油井清光編『海外における日本人，日本の中の外国人――グローバルな移民流動とエスノスケープ』昭和堂，239 ～ 253 頁
- 佐藤郡衛，2001『国際理解教育――多文化共生社会の学校づくり』明石書店
- 佐藤真知子，1993『新・海外定住時代――オーストラリアの日本人』新潮社
- 芝野淳一，2015「在外教育施設における『学力』問題――グアム日本人補習授業校におけるフィールドワークより」『部落解放』716，68 ～ 80 頁
- 長島怜央，2015『アメリカとグアム――植民地主義，レイシズム，先住民』有信堂
- 永田貴聖，2011『トランスナショナル・フィリピン人の民族誌』ナカニシヤ出版
- 長友 淳，2013『日本社会を「逃れる」――オーストラリアのライフスタイル移住』彩流社
- 額賀美紗子，2013『越境する日本人家族と教育――「グローバル型能力」育成の葛藤』勁草書房
- 広田照幸，1999『日本人のしつけは衰退したか――「教育する家族」のゆくえ』講談社現代新書
- 本田由紀，2008『「家庭教育」の隘路――子育てに強迫される母親たち』勁草書房
- 町村敬志，1999『越境者たちのロスアンジェルス』平凡社
- 南川文里，2007a「日系人／日本人女性のアメリカ経験――日系移民女性から留学ツーリズムまで」神戸市外国語大学研究会『外国学研究』66，27 ～ 41 頁
- 南川文里，2007b「二つのジャパニーズ――移動とエスニシティの現代社会論に向けて」米山 裕・河原典史編『日系人の経験と国際移動――在外日本人・移民の近現代史』人文書院，27 ～ 49 頁
- 山口 誠，2007『グアムと日本人――戦争を埋め立てた楽園』岩波新書
- 山口 誠，2010「米領グアム島にみる日本人観光の特性とその歴史性」『関西大学経済・政治研究所　資料と調査』107，97 ～ 111 頁
- 山田礼子，2004『「伝統的ジェンダー観」の神話を超えて――アメリカ駐在員夫人の意識変容』東信堂
- ヨー，ブレンダ，2007「女性化された移動と接続する場所――『家族』『国家』『市民社会』と交渉するトランスナショナルな移住女性」伊豫谷登士編『移動から場所を問う――現代移民研究の課題』有信堂，149 ～ 170 頁

欧文

- Benson, M., and O'Reilly, K., 2009, "Migration and the Search for a Better Way of Life: A Critical Exploration of Lifestyle Migration", *The Sociological Review*, 57 (4), pp.608-625.
- George, S. M., 2005, *When Women Come First: Gender and Class in Transnational Migration*. University of California Press.（= 2011，伊藤るり監訳『女が先に移り住むとき――在米インド人看護師のトランスナショナルな生活世界』有信堂高文社）。
- Hays, S., 1998, *The Cultural Contradictions of Motherhood*. New Haven: Yale University Press.
- Igarashi, H., 2015, "Privileged Japanese Transnational Families in Hawaii as Lifestyle Migrants", *Global Networks* 15 (1), pp.99-117.
- Kelsky, K., 2001, *Women on the Verge: Japanese Women, Western Dreams*. Durham and London: Duke University Press.
- Levitt, P., and Schiller, N. G., 2004, "Conceptualizing Simultaneity: A Transnational Social Field Perspective on Society", *International Migration Review* 38 (3), pp.1002-1039.
- Martin, R., 2007, *The Japanese Housewife Overseas: Adapting to Change of Culture and Status*. Kent: Global Oriental.
- O'Reilly, K., 2012, *Ethnographic Methods (2nd edition)*. Oxon: Routledge.
- Paerregaard, K., 2008, *Peruvians Dispersed: A Global Ethnography of Migration*. Lanham: Lexington Books.
- Shiobara, Y., 2005, "Asian Middle Class Immigrants and Welfare Multiculturalism: A Case Study of Japanese Community Organisation in Sydney", *Asian Studies Review* 29 (4), pp.395-414.
- Waters, J., 2002, "Flexible Families?: 'Astronaut' Households and the Experience of Lone Mothers in Vancouver, British Columbia", *Social and Cultural Geography* 3, pp.117-134.

Experiences around the Gender Role of Migrant Mothers:

A Case Study of Permanent Residents in Japanese Community in Guam

SHIBANO Junichi

Osaka Seikei University

Key Words: migrant mothers, gender role, Japanese community

Previous researches show that cotemporary trend of Japanese women's international migration leads to their desire for liberation from Japanese gender role which always constrain their lives. However, the topic about "migrant mothers" has been rarely featured. Focusing on Japanese mothers' gender role, this paper describes Japanese migrant mothers' experiences around the gender role who migrate to Guam, to examine how international migration is associated with gender role spreading in Japan.

The main results are twofold. Firstly, despite their dreams of liberation from Japanese gender role, they experienced the conflict of mothering in the process of internalizing cynical eyes of "unmotherly" casted from upper-middle class expatriate mothers as "education mothers", because they inevitably embeded into Japanese (school) community by children's school choice and ineluctably contact with them. Furthermore, it's led to constrain migrant mothers' sphere of life in the community. Secondly, however, migrant mothers took a strategy to liberate from such conflict. In making a sense of belonging to Guam, to set up against expatriate mothers, they constructed themselves as "strong mothers who survive in the foreign land" while they represented expatriate mothers as women who embodied the traditional gender role. While at the same time, to set up against migrant mothers, expatriate mothers made a sense of belonging to Japan by legitimizing the traditional gender role. In the final section, I discuss the implication of these findings for the relevant academic fields.